

# 古代のアサガホ

——朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあさがお説の検討

田 中 みどり

- はじめに
- 一、源氏物語のアサガホ
- 二、源氏物語の桔梗
- 三、桔梗
- 四、槿
- 五、昼顔、のあさがお
- 六、牽牛子
- 七、萬葉集のアサガホ
- 結び

古代のアサガホはカホガハナのうちの、朝に咲くことが特徴である花である。このアサガホには、現在の朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあさがおなどの説がある。朝顔は十月十一月に咲くこともある。源氏物語のアサガホは、長月に咲いている例もあるが、つる性の植物で、現代と同じ朝顔と考えてよい。源氏物語にも枕草子にもキキヤウとアサガホとが出てくるので、この時代には別の植物をさしていたことは明らかである。葉草としてのツルニンジン根あるいは食用としての若芽をトトキと呼ぶが、古代のキキヤウは、そのトトキの一種でヲカトトキと呼ばれていたものであるだろう。槿説については、ムクゲは和漢朗詠集に「槿」の詩と「あさがほ」の歌とが並べられているが、これは命の短い花ということで並べられたもので、「槿」がアサガホであるのではない。萬葉集のアサガホは朝に咲く花であることが明らかであるので、桔梗、槿、昼顔、のあさがお説は否定される。夕まで咲いている例があるが、朝顔は、早朝つぼみを開いて夕刻まで咲き続けることもないわけではない。よって、萬葉集のアサガホも、現代の朝顔と同じ牽牛子である。すなわち、牽牛子は、奈良時代に将来されたものである。アサガホの諸説は、古辞書や和漢朗詠集を文証とするものであるが、古辞書には出典を記していないものも多く、その記述をそのまま信じることもできないものもある。また、和漢朗詠集は同じ趣の漢詩と和歌とを並べているものであって、必ずしも同じ風物を集めたものでもないので、注意を要する。

## はじめに

古代のアサガホについて、現在の朝顔、桔梗、槿、昼顔、のあさがお、などの説がある。萬葉集にカホバナ・カホガハナ、

### 東歌

○うちひさつ宮の瀬川のかほ花(可保婆奈)の恋ひて

か寝らむ昨夜も今夜も [十四・3505]

○美夜自呂のすかへに立てるかほが花(可保我波奈)

な咲き出でそねこめてしのはむ [十四・3575]

があり(萬葉集の引用は、塙書房『萬葉集 本文篇』 西本願寺本を底本とする、一九六三年)に拠る。訳文は適宜勘案する。以下同)、アサガホはこれと関係のある花である、と考える。『歌経標式』(日本歌学大系第一巻、風間書房、一九七四年)の中に「阿佐我保我婆那 アサガホガハナ」があり、右の「可保我波奈 カホガハナ」と形を同じくする(傍線は筆者)ことも、これらの花が近い関係にあることを示すものであろう。

「アサ」は「麻」であるか「朝」であるかのどちらかである。のちの時代に「朝がお」があるのであり、また、「麻がお」に結びつく花はみつからないので、アサガホはカホガハナのうちの朝に咲く花である、と考える。萬葉集

の中にすでに、このアサガホが詠われていて、「朝に咲くことが特徴である花」が存在したことを示している。

### 一、源氏物語のアサガホ

アサガホは、平安朝の用例では、おおむね、今日の朝顔の花と同じものであった、と考えられている。例えば、源氏物語には、朝顔の花十例のほか、源氏がかつて朝顔の花を贈った齋院をさすもの一例、朝の顔をさすもの二例があるが、岩波新日本古典文学大系『源氏物語』では、朝顔の花について、とくに断っていないので、すべて現在の朝顔の花と同じ花と見做している、と考えられる。

以下、岩波新日本古典文学大系『源氏物語』(飛鳥井雅康等筆本五十三冊を底本とする。一九九三年～一九九七年)に拠る。以下、岩波新日本古典文学大系を「新大系」と略す。

また、小学館日本古典文学全集『源氏物語』(伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本などを底本とし、『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本とその他数種の青表紙諸本とによって校訂したもの。一九九四年～一九九八年)は、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めたり、漢語の韻尾を原則的にn音に統一するなどの操作を加えてあるため、底本とはし難いが、その注の部分に触れることが

あるため、全集本も並べて記す。以下、小学館日本古典文学全集を「全集」と略す。

そのうち、

① 枯れたる花どもの中に、朝顔（あさがほ）のこれかに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて、にほひもことに変はれるを、折らせ給てたてまつれ給ふ。

〔新大系『源氏物語』二、朝顔257-15〕

※全集では、

枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれてあるかなきかに咲きて、にほひもことに変れるを折らせたまひて奉れたまふ。

〔全集『源氏物語』二、朝顔475-14〕

② 秋はてて霧のまがきにむすほほれあるかなきかにつるあさがほ

〔新大系二、朝顔257-15〕

※全集では、

秋はてて霧のまがきにむすほほれあるかなきかにうつる朝顔

〔全集二、朝顔476-14〕

③ こなたより、やがて北にとをへほりて、明石の御方を見やりましたまへば、はかしくしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりてありく。はへわらははべなど、おへをかしき相

姿うちとけて、心とゞめとりわき植へへ給ふ竜胆（りんだう）、朝顔（あさがほ）のはいへひまじれる籬（ませ）も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。

〔新大系三、野分46-5〕

※全集では、

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりましたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりて歩（あり）く。童べなど、をかしき相姿うちとけて、心とどめとりわき植ゑたまふ竜胆（りうたん）、朝顔（あさがほ）の這ひまじれる籬（ませ）も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。

〔全集三、野分277-2〕

の「これかれに這ひまつはれて」「まがきにむすほほれ」「はいへひまじれる籬」などの描写は、アサガホがつける性の植物であることを示している（文中のへひ内は歴史的仮名づかいを表記したもの。括弧内は訓み。傍線は筆者。太字は筆者）。

アサガホは、『新牧野日本植物図鑑』（原著は牧野富太郎編集）大橋広好、邑田仁、岩槻邦男 北隆館 二〇〇八年）に、

2453 あさがお〔ひるがお科〕

*Ipomoea nil* (L.) Roth (*Phurbitis nil* (L.) Choisy)

アジアの原産で、最も普通に栽培される一年草である。茎はつる性で逆毛があり、左巻きで他物にからみつき、長さ3m以上になる。

葉は互生し長い柄があり、ふつうは3裂し両面には毛がある。夏、葉腋に大形の美しい花を開き、早朝に咲き午前中にしぼむので朝顔という。花は葉腋当たり1〜3個つく。がくは深く5裂し、裂片は細長く尖り、背面に白色の長毛がある。花冠は漏斗状で径10〜15cm、大きなものは径23cmにもなり、青紫色、白色、紅色、ふちどりのあるものなど数多い。つぼみは筆頭状で右巻きのみだがある。雄しべは5本、雌しべは1本。果実はさく果で残存がくをつけ、球形で3室あり、各室に種子が2個ずつ入っている。種子は葉用とし牽牛子という。観賞品として広く栽培され、葉や花に多くの変化改良が加えられている。〔漢名〕牽牛子、牽牛花という。

ところで、

④…常よりもやがてまどろまず明かし給へるあしたに、霧の籬（まがき）より、花の色／＼おもしろく見えわたれる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを、猶ことに目とまる心地し給。明くる間咲きてとか、常なき世にもなずらふるが、心ぐるしきなめりかし、格子も上げながら、いとかりそめにうち臥しつゝのみ明かしたまへば、この花の開くる程をも、たゞひとりのみ見給ひける。〔新大系五、宿木4018〕

※全集では、

…常よりも、やがてまどろまず明かしたまへる朝に、霧の籬（まがき）より、花の色々おもしろく見えわたる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを、なほことに目とまる心地したまふ。「明くる間咲きて」とか、常なき世にもなずらふるが、心苦しきなめりかし、格子も上げながら、いとかりそめにうち臥しつゝのみ明かしたまへば、この花の開くるほどをも、ただ独りのみぞ見たまひける。

〔全集五、宿木39014〕

の「朝顔」について、全集では、

◇現在の朝顔と同じ。歌言葉としては、はかなさ、または朝の女の素顔を連想。ここは前者。

とある。

と言ひ(傍線||筆者)、「明るく咲きて」について、

◇『花鳥余情』は「朝がほは常なき花の色なれやあく  
るま咲きてうつろひにけり」(出典未詳)を掲げる。

と言う。この場合、頃は八月のことである(新大系五37  
15「八月になりぬれば」。全集五38514「八月に  
なりぬれば」。が、①の

枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひま  
つはれてあるかなきかに咲きて、にほひもことに  
変れるを折らせたまひて奉れたまふ。

「全集『源氏物語』二、朝顔475114」  
の「朝顔」について、全集の注に、

◇「朝顔」の花は現在の朝顔か。平安時代に唐から輸  
入された。舶来の新しい花らしいが、季節にやや不  
審がある。桔梗ききょう、木槿むくげ、昼顔などの説  
もある。

と言う。また、③の

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見  
やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見  
えず、馴れたる下仕どもぞ、草の中にまじりて歩  
(あり)く。童べなど、をかしき相姿うちとけて、  
心とどめとりわき植ゑたまふ竜胆(りうたん)、  
朝顔(あさがほ)の這ひまじれる籬(ませ)も、

みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなる  
べし。 「全集三、野分27712」

について、

◇「竜胆」は、紫色の鐘状の花を咲かせる秋草。「朝  
顔」↓朝顔②四七五注一八。「りんだう朝がほは  
とりわきて、おもしろき花とみえたり」(湖月抄)。

と言う(②四七五注一八)とは、右の①の注を指す。  
全集は、アサガホを、おおむね、今日と同じ朝顔の花と見  
ているながら、①については「季節にやや不審がある」と言  
っているわけである。これは、これより前の記述に「なが  
月になりて」(新大系二25215)「長月になりて」(全  
集二46916)とあり、晩秋のことであるので、朝顔の  
咲く時期ではない、と考えてのことである。また、③につ  
いては、

○心とどめとりわき植ゑたまふ竜胆(りうたん)、朝  
顔(あさがほ)の這ひまじれる籬(ませ)も、みな  
散り乱れたる

という状況から、晩秋のことであると考へてのことである  
う。

しかし、遅咲きの朝顔の花が十月十一月に咲くこともあ  
り、また、朝顔とはいっても夕刻にまで咲きつづけること  
も、それほど特異なことではない(筆者は、二〇一〇年の

十一月十三日に、三重県伊勢市で、白い朝顔の一つの花が夕刻まで咲き続けるのを実見した)ので、京で長月に朝顔が咲くこともないわけではない、と考える。

## 二、源氏物語の桔梗

全集では、朝顔が長月に咲いていることをもって、

◇「朝顔」の花は現在の朝顔か。平安時代に唐から輸入された。舶来の新しい花らしいが、季節にやや不審がある。桔梗ききょう、木槿むくげ、昼顔などの説もある。 [全集二、朝顔475-14の注]

と言う。

このうち桔梗は、源氏物語の中に一例、

⑤これもいと心ぼそき住まるへひのつれづれなれど、住みつきたる人とは、物きよげにおへをかしうしなして、垣ほに植へへゑたる撫子もおもしろく、女郎花、き経(きやう)など咲きはじめたるに、色みの狩衣姿の男どもの若きあまたして、君もおなじ装束にて、南をへおもてに呼び据へへゑたれば、うちながめてゐたり。

〔新大系五、手習342-8〕

\*全集では、

これもいと心細き住まひのつれづれなれど、住み

つきたる人々は、ものきよげにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗(ききやう)など咲きはじめたるに、いろいろの狩衣姿の男どもの若きあまたして、君も同じ装束にて、南面に呼び据ゑたれば、うちながめてゐたり。 [全集六、手習305-3]

があるのであるから、源氏物語では、アサガホとキキヤウとは別の植物ととらえていたことが明白である。同じ時代の枕草子にも、

○草の花は、撫子。唐のはさら也、大和のもいとめでたし。女郎花。桔梗(ききやう)。朝貞(あさがほ)。刈萱。菊。壺葦。

竜胆(りんだう)は、(中略)：

夕顔は、花の形も槿(あさがほ)に似て、いひつゞけたるに、いとおへをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそいとくちおへをしけれ。 (後略) …

〔新大系『枕草子』三巻本系統第一

類の陽明文庫蔵本を底本とする一

九九一年。六四段・草の花は〕

○草の花は などでし。唐のはさらなり、やまこのもいとめでたし。女郎花。桔梗(ききやう)。朝顔。

かるかや。菊。つぼすみれ。竜胆（りんだう）は、  
：（中略）：

夕顔は、花のかたちもあさがほに似て、言ひつづ  
けたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のあ  
りさまこそいとくちをしけれ。：（後略）：

〔全集『枕草子』 陽明文庫蔵本を底  
本とする 一九九七年。六五段・草  
の花は〕

のように、キキヤウとアサガホとを並べており、また、ユ  
フガホの花の形がアサガホと似ている、とも言っている。  
よって、源氏物語に、アサガホハ桔梗説のような注をつ  
けることは間違いである。この注は、萬葉集のアサガホの  
説、

◇「朝顔」については、今の何にあたるか未詳。今日  
いう所の朝顔、または木槿、または桔梗かともいう。

〔新大系『萬葉集 二』巻第八・1538 注〕  
◇「朝顔」は、牽牛子（いわゆるアサガオ）、ノアサ  
ガオ、キキョウ、ムクゲなどの諸説がある。未詳。

〔新大系『萬葉集 二』巻第十・2104 注〕  
◇朝顔が花——未詳。①牽牛子けにごし（今日の朝  
顔）、②木槿むくげ（あおい科の落葉低木）、③桔梗  
ききょうなどに擬する説がある。①は『本草和名』

『和名抄』、②は『和漢朗詠集』、③は『新撰字鏡』  
にそれぞれ文証がある。①は平安時代に渡来した輸  
入植物で上代にはなかったとする説があり、②は七  
種のうちこれだけが木本である点に疑いがあり、③  
が比較的妥当かといわれる。しかし、在来種で昼  
間も咲き続ける牽牛子の存在が報告されており（二  
一〇四）、①説も捨て難い。ほかに旋花（ひるがお）  
説もある。なお、『歌経標式』に「風吹けば雲のき  
ぬがさ竜田山いとははせる阿佐我保我婆那」とあ  
るによつて、アサガホガハナと読む。

〔全集『萬葉集 二』八・1538 注〕  
などをそのまま横滑りさせたものにほかならない。

右の萬葉集巻第十・2104の新大系の注には、アサガ  
オ、キキョウ、ムクゲ、ヒルガオのほか、ノアサガオが  
ある。ノアサガオについては、巻十・2104の全集の注  
に、

◇朝顔——ここは牽牛子けにごしをいうか。↓②一五  
三八（朝顔が花）。ただしここは昼間も咲き続けて  
いる趣なので、ひるがお科のあさがおをさしたも  
のかとも思われる。のあさがおは夜明け前に咲き、  
夕方までしばまない性質を有する。咲き始めは透明  
な青紫色、日中はすみれ色、その後、赤紫色と微妙

に変化する。ただ自生地が地域的に沖縄地方・伊豆七島・紀伊半島や四国・九州の南部と片寄っている点に疑問がなくもない。〔十・2104 注〕

とあるが、日本国語大辞典第一版のノアサガオの項には、

◇の「あさがお【野朝顔】〔名〕「方言」植物、ひるが

お(昼顔)。

岡山県御津郡743 長門

†73 広島県比婆郡75

1 熊本県南関947

と云う。『日本植物方言集成』(八坂書房、二〇〇一年)によれば、

ヒルガオ(ヒルガオ科 草本)のことを方言で「のあ

さがお」と言う地域――

長門 秋田 岡山(御都) 広島(比婆) 高知

(香美) 熊本(玉名・菊池)

もある一方、

ノアサガオ(ヒルガオ科 草本)のことを方言で

「かんじゃ」という地域――鹿児島(徳之島)

「やまかんだ」と言う地域――沖縄(首里)

「やまかんだ」と言う地域――沖縄(島尻・首里)

があげられており、この場合、ノアサガオはヒルガオの方言ではなく、ヒルガオ科の一種である。ヒルガオそのもの

ではなくとも、ヒルガオに含めて考えてよいものであろう。キキョウもムクゲもヒルガオもノアサガオも、朝咲いて夕刻まで咲きつづける花である。これらの花に「朝ガホ」という名をつける理由はない。

また、枕草子には、ユフガホの花の形がアサガホに似ている、と言っている。ユフガホは夕に咲くから「夕ガホ」であり、アサガホは朝に咲くから「朝ガホ」である。

「朝」ということばをその名にもっていることと、花の形が夕顔に似ていると枕草子にあること、源氏物語のアサガホはつる性の植物であること、アサガオが長月に咲くこともないわけではないところから、源氏物語の「朝顔」はすべて、今日のアサガオと同じものである、と結論づける。

### 三、桔梗

アサガホキキョウ説は、新撰字鏡の

「桔梗 二八月採根曝干 阿佐加保 又云 岡止、支」(天治本)

を典拠とするものである。が、ほかに新撰字鏡には

「桔梗 上居韻反下柯杏反 加良久波 又云 阿佐加保」(抄本)

「桔梗 上居韻反下柯杏反 皆也強也直也猛也病也覺也略也員也 加良久波 又 酒木 又 阿知万佐



又 久須乃木(天治本)

もあり、さまざまな和名が「桔梗」にあてられている(新撰字鏡は臨川書店『新撰字鏡』一九七三年に拠る)。

二にも述べたように、源氏物語に「キキヤウ」の用例が一例ある。新大系では「き経」と表記しているのが、飛鳥井雅康の時代には「キキヤウ」と呼んでいたことがわかる。

また、古今和歌集巻第十 物名 にキチカウの例がある(〈 〉内は歴史的仮名づかいを表記したものの。括弧内のカタカナ筆者)。

桔梗の花 友則

○秋近う(キチカウ)野はなりにけりしらつゆのを

〈お〉ける草葉も色かはり行

〔新大系『古今和歌集』巻第十・440〕

さらに、古今和歌六帖にもキチカウの例がある(括弧内のカタカナ筆者)。

きちかう

○秋ちかう(キチカウ)のはなりにけり白露のおける

くさ葉も色かはり行く

〔新編国歌大観 古今和歌六帖第六・3769〕

○あきのつきちかう(キチカウ)てらすとみえつるは  
つゆにうつろふ光なりけり

〔新編国歌大観 古今和歌六帖第六・3770〕

すなわち、桔梗は、古今和歌集や古今和歌六帖の時代には

キチカウと呼ばれ、源氏物語を書写した飛鳥井雅康の時代

までにはキキヤウと発音を変えていたということである。いづれも「桔梗」の音読み(と、その変化したもの)であ

って、和名ではないことを、ここで注意しておきたい。ところで、この古今和歌集のキチカウの例は、ケニゴシ

(薬剤で、今日の朝顔の種子。後述Ⅱ《六、牽牛子》)の例、

牽牛子 矢田部名実

○打ちつけに濃し(ケニゴシ)とや花の色を見むを

〈お〉くしらつゆの染むる許を

〔新大系『古今和歌集』巻第十・444〕

のすぐ手前に収録されている。ということは、古今集の時代には、ケニゴシとキチカウとは同時に存在していた、ということである。

また、拾遺和歌集巻第七 物名 には「きちかう」「あ

さがほ」「けにごし」などが並んでいる。その、新大系の注には、

注には、

◇きちかう キキョウ。桔梗。古今集の物名の題に

「きちかうの花」として詠まれる。枕草子・草の花は「ききやう」。

〔新大系『拾遺和歌集』巻第七・363 注〕

◇あさがほ 朝顔。キキョウ・ムクゲなどといわれるが、この時期では、現在のアサガオと同じ「けにごし」をさすことが多い。

〔新大系『拾遺和歌集』巻第七・364 注〕

◇けにごし 牽牛子。アサガオ。古今集の物名の題に見える。

〔新大系『拾遺和歌集』巻第七・365 注〕

とあり、キチカウは今日の桔梗であり、アサガホは「けにごし」をさすことが多い、としている（ここにアサガホとケニゴシが並んでいるのは、物名を詠むという趣旨で、花としてのアサガホと薬剤としての種子のケニゴシとのふたつの呼び方のものを入れたからである）。

#### 新撰字鏡の

桔梗 二八月採根曝干 阿佐加保 又云 岡止も支

の「二八月採根曝干」は、桔梗も、ケニゴシと同じく、薬草として栽培されることを示す。中葉大辞典（小学館 一九八五年）に、

1320 牽牛子（ケンゴシ）

「水を瀉ぎだす、気を下す、殺虫する、の効能がある。浮腫、喘満、痰飲、脚氣、虫積食

滯（寄生虫による消化不良）、大便秘結を治す。」

0763 桔梗（キキョウ）

「肺氣を開き宣らせる、去痰し膿を排出する、の効能がある。外感咳嗽、咽喉腫痛、胸満脇痛、痢疾腹痛を治す。」

と言う。

桔梗 上居頡反下柯杏反 加良久波 又云 阿佐加保

の「加良久波 カラクハ（唐桑）」は木本であつて、まったく懸離れた植物である。また、

桔梗 上居頡反下柯杏反 宮也強也直也猛也病也覺也略也員也 加良久波 又 酒木 又 阿知万佐

又 久須乃木

では、「酒木 サカキ（榊）」「阿知万佐 アチマサ（檳榔）」「久須乃木 クスノキ（楠）」なども桔梗とされるなど、この項目については信頼をおくことができない。新撰字鏡ひとつだけでも、このように多くの植物があてられていて、雑多なものを並べているように見える。これは、薬剤や香材として、アサカホ・ヲカトトキのほか唐桑・榊・檳榔・楠などが同時に輸入されたための混乱ではないか、と考える。

本草和名(日本古典全集、日本古典全集刊行会 一九二五年)には、

桔梗 仁○上音結 一名薺○ 乃礼反 一名利如 一名

房圖 一名白葉 一名便草葉隱忍 一名府蘆

一名房莖 一名蘆茹已上三名出釈薬性 和名阿利

乃比布岐 一名乎加止と岐

檳榔 猪檳榔 蒚子 一名木実 和名阿知未佐

楠材 和名久須乃岐

桑根白皮 一名伏地出土上者 一名顛根直入土中者出○要訣

和名久波乃加波

があり、中藥大辞典には、

4613 檳榔(ビンロウ)

「殺虫する、積を破る、氣を下す、水を行ら

す、の効能がある。寄生虫による腹内の硬結、

食滞、胃や腹の腫痛、下痢後重(渋り腹)、

マラリア、水腫、脚氣、痰癰、癥結(腹中の

硬結)を治す。」

と言う(ほかは、本草和名・中藥大辞典に項目が見あたらなかつた)。

時代別国語大辞典上代編「あさがほ」の項では、新撰字鏡や本草和名、和名抄などを挙げて、

◇秋の野花であるが、具体的に何をさしたものは未詳。「風吹けば雲のきぬがさたつた山いとにはせる阿佐我保へあさがほ」が花(歌式)「萩の花尾花

葛花瞿麦へナデシコ」が花女郎花また藤袴朝貞へあ

さがほ」が花(万二五三八)「朝果へあさがほ」は

朝露負ひて咲くといへど夕かげにこそ咲きまさりけ

れ(万二二〇四)「こいまるび恋ひは死ぬともいち

しろく色にはいでじ朝容貞へあさがほ」の花(万

二二七四)

【考】…新撰字鏡に「桔梗 阿佐加保(アサガホ)、

又岡止々支(ヲカトトキ)」、本草和名に「桔梗 阿

利乃比布岐(アリノヒフキ)、一名 乎加止々岐

(ヲカトトキ)」とあり、名義抄にも「桔梗 アリ

ノヒフキ」とある。新撰字鏡の和名を信ずれば、桔

梗の和名は次第に変遷したもので、古くアサガホと

よばれたものと考えられ、その点からはこの説がか

なり有力と思われる。ただし、この草は第二、三例

にはよくあてはまるが、第四例や枕詞アサガホに

ついては、その花の紫碧色である点、適当でない感

がある。…

と言っているのであるが(傍線||筆者)、「新撰字鏡の和名を信ずれば」とことわっているが、何をもって、「桔梗

の和名は次第に変遷した。「古くアサガホとよばれた」といえるのか不明である。アサガホ→ヲカトトキ→アリノヒフキと変遷した、と言うのであろうか。また、「その花の紫碧色である点」から、適当ではない例もあるともいつているが、紫碧色であることが、「いちしろく色に」出る(十・2274)ことや、「あさがほのほには咲き出ぬ恋もするかも」(十・2275)に適当でないという理由も不明である。明るい色を想定しているのであろうか。

ここに挙げられた説は、いずれも古辞書の記述に拠っているのであるが、古辞書は出典を明記しないものが多く、これらの古辞書が何を引用したものであるのかわからないため、その正否を確かめる術がない。そして、時代別国語大辞典は「新撰字鏡の和名を信ずれば」と言いながらも、新撰字鏡にのみある記述が古いものであると考えているらしいところに、古辞書の取り扱いのあやうさがうかがえる。

さて、広辞苑に「つりがねにんじん【釣鐘人参】」がある。

○キキョウ科の多年草。山地に普通。高さ約一拵。三葉輪生。夏から秋にかけ茎頂に淡紫色の小さな鐘形花を数段に輪生し下垂。若葉は山菜として食用、根は乾して祛痰薬とする。トトキ。

「広辞苑第四版、一九九一年」  
また、「ききょう【桔梗】」の項に、

○①キキョウ科の多年草。茎は約一拵。夏秋の頃、茎の先端に五裂の青紫色または白色の美しい鐘形花を開く。果実は蒴果(さくか)。山地・草原に自生し、秋の七草の一。根は牛蒡(ごぼう)状で太く、乾したものを生薬の桔梗根とよび、去痰・鎮咳薬。古名、おかととき。さちこう。〈季・秋〉

「ととき【植】」の項に、

○①ツリガネニンジンの別称。また、その若芽の山菜としての名称。

②ツルニンジンの別称。

「広辞苑第四版、一九九一年」  
「おかととき【桔梗】」の項に、

○キキョウの古名。〈新撰字鏡七〉

「広辞苑第四版、一九九一年」  
とある(傍線は筆者)。ツリガネニンジン、また、その若芽を、「ととき」というとあるが、このツリガネニンジンもキキョウ科の植物であるから、桔梗は「トトキ」の一種の「ヲカトトキ」と呼ばれていた、と考えられる。古く、ツリガネニンジンをとトキと呼んでいたのか、あるいは、

トトキの名が、ツリガネニンジンあるいはその若芽に残ったのかの、いずれかである。そして、この「ヲカトトキ」が「桔梗」の古い和名であって、これを新撰字鏡に「阿佐加保」ともいうのは、同じ薬材であったケニゴシとの混同であろう。

以上述べたところより、古代の「桔梗」に和名をあてるとするならば、「ヲカトトキ」であると、試みに想定する。

ただ、古今和歌集などのキチカウは物名の歌であって、桔梗の花そのものを詠んだものではなく、源氏物語や枕草子などにキキヤウとして述べられている花は、音読みに由来するものであるとすると、薬草としてのヲカトトキと觀賞花としてのキキヤウとは、別途に享受されたものであることがわかる。また、觀賞花のほうが音読みであるところに、この花の珍重された時代が遅いことがわかる。

#### 四、槿

アサガホムクゲ説は、新撰字鏡の

「薺 館閩反 木槿」

和名抄（『諸本集成 倭名類聚抄』臨川書店、一九六八年に拠る）の

「薺 文字集略云薺

音薺和名岐波知須

地蓮花

朝生

夕落者也」（真福寺本）

観智院本類聚名義抄（風間書房、一九七五年に拠る）の

「槿 音謹 アサカホ シフシ 予柄槲也 古作董櫨

也」（佛下本一〇九）

「薺 音薺 キバチス アサカホ」（僧上六）

などを典拠とするものである。ただし、名義抄には、他にも、「槿」（佛下本九六）、「苜」（僧上九）、「牽牛子」（法下一三七）などをも「アサカホ」と訓んでいる。

和名抄に「朝生夕落者也」ともあるように、ムクゲは一日花であって、「朝ガホ」という名にそぐわない。中葉大辞典に、

5051 木槿花（モクキンカ）

「清熱する、湿を利す、血を涼める、の効能がある。腸風瀉血（風による腸の出血）、痢疾、白帯を治す。」

5052 木槿根（モクキンコン）

「清熱し解毒する、湿を利す、腫れを消す、の効能がある。咳嗽、肺癰、腸癰、腸風瀉血（出血性大腸疾患の類）、痔瘡による腫痛、白帯、疥癬を治す。」

5053 木槿子（モクキンシ）

「本草綱目」偏正頭風（頭痛や偏頭痛）を治すには、薬性を残す程度に焼き、猪骨、猪

髓で調べて塗布する。」「〔飲片新参〕「肺を清め痰を化す。肺風痰喘、咳嗽による音瘖（声のかれ）を治す。」

5054 木槿皮（モクキンピ）

「清熱する、湿を利す、解毒する、かゆみを止める、の効能がある。腸風瀉血、痢疾、脱肛、白帶、疥癬、痔瘡を治す。」

5055 木槿葉（モクキンヨウ）

「本草品彙精要」「腸風、痢後熱渴を主る。」

「本草彙言」「あらゆる熱を除く、積滯を下すのを導くことができる。赤白積痢、乾澁（乾き滞る）して通らない、下墜して解けそ<sub>う</sub>だが解けないものを治す。つき汁に生白酒を混ぜ合わせ温めて飲む。」

と言う。

ところで、源氏物語と同時代の書に、和漢朗詠集がある（小学館日本古典文学全集『和漢朗詠集』 伝藤原行成筆御物粘葉本を底本とする。一九九九年―に拠る）。

和漢朗詠集「卷上 秋 槿」の項に、

槿むくげ  
アサガホ

291 松樹千年終是朽 槿花一日自為榮 白

292 来而不留 薤瓏有弘農之露  
去而不返 槿籬無投暮之花

願文 中書王

293 おぼつかかな誰とか知らむ朝霧の絶えまに見ゆるあさがほの花

294 あさがほをなにはかなしと思ひけむ人をも花はいかが見るらむ 道信少将

「全集『和漢朗詠集』 秋 槿」

とあって、ここでは、漢詩文の「槿」に対してアサガホを合わせてある。題の右側の訓「むくげ」は全集の訓み、左側の訓「アサガホ」は江戸時代前期の御物粘帖本の複製本の「解説并釈文」に掲載する「伝後水尾院御訓点本（寛文八年筆、享保十四年写）の総付訓によるものという<sup>4</sup>。また、題の「槿」の全集注に、

◇アオイ科の落葉低木。高さ約3トクメ。夏、淡紅・紫・

白色などの花を咲かせる。花は朝開き、夜しぼむ。

古くは「あさがお」といった。

と言う。すなわち、全集『和漢朗詠集』では、和漢朗詠集の当時、今のムクゲを「アサガホ」と呼んでいた、と言うのである。

和漢朗詠集は、四季、自然、人事などの部立のもとに、

漢詩文（唐・和）587首と和歌216首を収めたものである。冒頭、〈立春〉の題には、紀淑望と藤原篤茂の立春の漢詩文と在原元方の立春の和歌とがあつてある（「立春」番号は全集に拠る）。

1 逐吹潜開 不待芳菲之候  
迎春乍變 將希雨露之恩

立春日内園進花賦

2 池凍東頭風度解 窓梅北面雪封寒

篤茂

3 年のうちに春は来にけりひととせを去年とや  
いはむ今年とやいはむ

元方

立春の日の自然をよんだ漢詩文に対して、和歌は年が改まらないうちに立春がくるという閏年の齟齬を頭でよんだものである。次には、白居易の漢詩文二つ、惟良春道の漢詩文、紀貫之の和歌、壬生忠岑の和歌。〈立春〉を詠んだものとしては近い詠である。が、

4 柳無氣力条先動 池有波文氷尽開  
5 今日不知誰計会 春風春水一時来

同上

7 袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つ今日

の風やとくらん

紀貫之

とは、氷や水を詠んでいて、同じ趣であるが、

6 夜向残更寒聲尽 春生香火曉炉燃

良春道

は、火を詠んでいる点、少し隔たっている。

8 春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみ  
て今日のみゆらむ

忠岑

は、山で、これも少し隔たっている。〈立春〉という題のもとはなくくりにはできるが、必ずしも同じ趣の漢詩文と和歌とが合せてあるわけではない。

次に、卷上 夏 〈郭公〉の題のもものでは、許渾の漢詩文

182 一声山鳥曙雲外 万点水蛭秋草中

許渾

と明日香王子・源公忠・壬生忠見のホトトギスの和歌があつてある。

183 五月やみおぼつかなきにほととぎす鳴くなる  
声のいとどはるけさ

明日香王子

184 行きやらで山路暮らしつほととぎすいま一声  
の聞かまほしさに

公忠

185 さ夜ふけて寝ざめざりせばほととぎす人づて  
にこそ聞くべかりけれ

忠見

許渾の詩は、全集『和漢朗詠集』漢詩文全文一覧によれば、

丁卯集 卷上 「自楞伽寺、晨起汎舟、道中有懷」

碧樹蒼蒼茂苑東 佳期迢遞路何窮

一声山鳥曙雲外 万点水蛩秋草中

門掩竹齋微有月 棹移蘭渚淡無風

欲知此路堪惆悵 菱葉蓼花連故宮

であるという。この「山鳥」は何の鳥であるとは解らない。

しかし、〈郭公〉の題に収められているので、頭注では、

◇ここでは、ほととぎす。

としているのである。第二番目の和歌の、

184 行きやらで山路暮らしつほととぎすいま一声

の聞かまほしさに 公忠

のように、平安朝ではホトトギスの一声が珍重されたため、

「一声山鳥」がホトトギスの一声を思い浮かべさせるため

であった。

同じことは、和漢朗詠集「權」のひとつ前の項目「蘭」

についても言える。

蘭 ふちばかま

286 前頭更有蕭条物 老菊衰蘭三両叢 白

287 扶桑豈無影乎 浮雲掩而忽昏

叢蘭豈不芳乎 秋風吹而先敗

菟裘賦 中書王

288 凝如鳳女顔施粉 滴似鮫人眼泣珠 都

289 曲驚楚客秋絃馥 夢斷燕姬曉枕薰

直幹

290 ぬし知らぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎ

かけしふちばかまぞも

索性

〔全集』『和漢朗詠集』 秋 蘭〕

中国で「蘭」はラン（東洋らん）である。和製の漢詩文で

はランであったかフジバカマであったかはわからない。第

一詩は白居易のもの（『文集』『杪秋独夜』）であるから、

ラン。第三詩（『文選』江淹「別賦」 「紅蘭の露を受く

るを見る」・第四詩（『天徳三年八月十六日闕詩行事略記』

「蘭気軽風に入る」）はともに中国の故事をふまえたもの

であるから、この「蘭」もラン。全集『和漢朗詠集』の訳

に、第二詩の「蘭」のみ「ふちばかま」とルビをふり、第

一・第三・第四詩にはルビをふつてないのは、これらがフ

ジバカマではなくランである、と解釈するからである。第

二詩は中国にならつてランを詠んだものともとれるし、日

本には中国でいうところのランは存在しないからフジバカ

マなどの香草を詠んだものともとれる（全集はフジバカマ

と考えている）。和歌は「ふちばかま」。

第一詩をもとに藤原定家が詠んだ歌に、

老菊衰蘭両三叢

ふちばかま嵐のくだくむらさきに又しら菊の色やな



らはん『新編国歌大観』『拾遺愚草員外』443

があるから、少なくとも定家は「蘭」をフジバカマであると扱っていたことがわかる。

フジバカマは芳香をはなつため、ここでランとあわせられている。ランは懐風藻にも、

67 五言。元日宴。応詔。一首。

(左大臣正二位長屋王)

…柳絲入歌曲。蘭香染舞巾。…

『岩波日本古典文學大系』懐風藻 文華秀麗

集 本朝文粹』一九六四年

のようによまれているから、フジバカマとランとが別の花であることは、公任も認識していたであろう。しかし、和漢朗詠集にこのように並べられたものが人々に広まっていこうち、フジバカマとランとが同一視されて、「フジバカマ」を表わすときに、「蘭」と書くようになっていったものである。

今の「榿」と「アサガホ」も、同じである。ムクゲは朝開き夜しほむため、白居易の詩にあるように、「榿花一日自為榮」と、一日の命を詠われる。中書王(兼明親王)の「去而不返 榿籬無投暮之花」でもやはり夕方に散ってしまいう花である。はじめにも述べたように、全集『和漢朗詠

集』の「榿」の注では

◇アオイ科の落葉低木。高さ約三メートル。夏、淡紅・紫・白色などの花を咲かせる。花は朝開き、夜しほむ。

古くは「あさがお」といった。

と言つて、ムクゲを古くは「アサガホ」と呼んでいたとしている。そして、あとの293「おぼつかかな」の歌の「あさがほの花」は

◇今のあさがお。

と注している。294「あさがほを」の歌は、

◇『今昔物語集』巻二十四ノ三十八に「此の中將(道

信)、殿上にして数の人々有て世の中の墓無き事共

を云て、牽牛子(あさがほ)の花を見ると云心を、

中將此(かく)なむ、『あさがほをなにはかなしと

思ひけむ人をも花はさこそみるらめ』

と注していて、これも「牽牛子」であるから、「今の朝顔」

である。すなわち、全集の解釈では、平安朝では漢詩文の

「榿 ムクゲ」のことを「アサガホ」と言い、和歌の「あ

さがほ」は今日の朝顔の花である、ということになる。と

すると、ムクゲもアサガオも「アサガホ」と言っていた、

ということである。

しかし、この場合もやはり公任は、懐風藻の

36 五言。從駕。応詔。一首。

(皇太子学士従五位下伊與部馬養)

…舞庭落夏槿。歌林驚秋槿。…

などの詩により、ムクゲとアサガオの違いを認識していながら、花の命が短いという共通項でもって、「槿」の詩と「朝顔」の歌をあつめたのであろう。このことから、和漢朗詠集を享受した人々が、「槿」という植物を未だ知らずに、「槿」と「アサガオ」とを同一視したのであろう。

現在、新撰字鏡の「舜 木槿」、和名抄の「舜 岐波知須へキバチス」、観智院本名義抄の「槿 音謹 アサカホ シフシ 予柄椀也 古作董椀也」「舜 音舜 キバチス アサカホ」の記述からアサガオ＝槿説が出ており、古代のアサガオはムクゲであった、とするのは、和漢朗詠集の〈槿〉の題に「槿」と「朝顔」とがあつめられていることに拠るものではないか。ということは、観智院本類聚名義抄のこの項の出典が和漢朗詠集であるということになるのであるが、この漢詩文と和歌とのあつめかたをもとに、平安朝の人々のうちでも、少なくとも名義抄の編者は、ムクゲとアサガオを同一視していた、ということと言える。<sup>8)</sup>

### 五、昼顔、のあさがお

ヒルガオは、新牧野日本植物図鑑に、

2449 ヒルガオ〔ひるがお科〕

*Calystegia pubescens* Lindl.f. major (Makino) Yonek. (C. japonica Choisy)

北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布、野原や道ばたに普通に見られる多年草。地中を横走する白色の地下茎から長い性の茎を出して巻きつく。葉は長い柄があり互生し、長楕円状披針形で、大きいものは長さ10cmもあり、基部両側は耳形で尖る。夏、葉腋に長い花柄を出し、頂に1個の大きい淡紅色の花を開く。がく片は5個、がくの外側に卵型の苞葉が2個あり、二枚貝状に相對してつく。花冠は漏斗形で、径約5cm内外。雄しべは5本、雌しべは1本、普通は結実しない。花は日中に咲くのでヒルガオの名が付けられた。人によってはオオヒルガオともいう。〔漢名〕旋花または鼓子花という。〔追記〕テンシボタン‘Flore pleno’と呼ばれる八重咲き品が学名の基本品である。

とあり、本草和名に、

「旋花 一名勸根花 一名金沸 一名美草 一名三薑

一名薑旋 一名鼓子花 和名波也比止久佐 一名加

末」

とあるものが、それにあたる。新牧野日本植物図鑑に言うように、この花は日中に咲くのでヒルガオと名づけられたものである。アサガオに対しての名である。

また、ノアサガオをアサガホに擬する説もあるが、《二、源氏物語の桔梗》に述べたように、ヒルガオ科の一種であるので、ヒルガオの中にノアサガオを含めて考えてよい。新牧野日本植物図鑑には、

2455ノアサガオ〔ひるがお科〕

*Ipomoea indica* (Burm.) Merr. (*Pharbitis congesta* (R.Br.) H.Hara)

東南アジア、オーストラリアなど旧大陸熱帯と亜熱帯地方の海岸に広く分布し、日本では伊豆七島、小笠原、紀伊半島、四国、九州以南の低地の草地、崖、海浜などに生える多年草。茎は多少毛があり、つる性で細く長いが、根元は木質化する。葉は互生し、柄は長く3〜8 cm、葉身は長さ5〜10 cm、幅4〜8 cmの心臟形で先端は鋭く尖り、全縁で葉の質は比較的薄い。葉の両面に毛が多い。夏から秋遅くまで枝先に花序を出し、1〜3花をつける。花序柄は2〜5 cm、葉柄より短い。花はアサガオによく似て紅紫色で美しい。苞は線状披

針形で、長さ2 cm。かく裂片は披針形で先は長く尖り2 cmほど。花冠は紫色で、径6〜7 cm、長さ7〜8 cmある。雌しべの花柱は3〜4 cm。さく果は球形で海流により漂着、散布すると思われる。

とある。  
ヒルガオは日中に花を開くのであるから、「朝ガホ」という名にあたらぬ。

## 六、牽牛子

本草和名に、

「牽牛子 陶景注此出於田舎凡人取牽牛易故以名之 和名阿佐

加保」

和名抄に、

「牽牛子 陶隱居本草注云牽牛子 和名阿佐加保 此出

於田舎凡人取之牽牛易藥故以名之」

観智院本名義抄に、

「牽牛子 アサガホ」(法下一三七)

とある。

「牽牛子」とは「アサガホの種子」で、強い瀉下作用をもつ薬材である。中葉大辞典に、

1320 牽牛子(ケンゴシ)

ヒルガオ科の植物、牽牛(ケンゴ) 和名アサガオ)、毛牽牛(モウケンゴ) 和名マルバアサガオ)などの種子。

「水を瀉ぎだす、気を下す、殺虫する、の効能がある。浮腫、喘満、痰飲、脚氣、虫積食滞(寄生虫による消化不良)、大便秘結を治す。」

と言う。古くは、撥音に「ニ」をあてて「ケニコシ」と表記する。

ここに牽牛子は「牽牛(ケンゴ) 和名アサガオ)、毛牽牛(モウケンゴ) 和名マルバアサガオ)などの種子」とある。アサガオについては、『一、源氏物語のアサガオ』に新牧野日本植物図鑑の解説を記した。マルバアサガオは新牧野日本植物図鑑に、

2454 マルバアサガオ〔ひるがお科〕

*Ipomea purpurea* (L.) Roth (*Pharbitis purpurea* (L.) Voigt)

熱帯アメリカ原産の外來種で、時に栽培される一年草である。全体アサガオに似て茎は左巻きで他物にからみつき、長さ1.5mになり葉が多い。葉は互生し長い柄があり、円形で先は尖り、基部は心臟形で全縁、長さ7〜13cm。

夏、葉腋に花序を出して紅紫色の花を開く。

花は普通数個が散形につく。がくは5裂し背面に短毛があり、裂片は幅広い。花冠は漏斗形で長さ5〜8cm。雄しべは5本、雌しべは1本。花後に花柄は下を向き、果実は、残存がく内で成熟する。果実はさく果で3室からなり、1室ごとに2個の種子を含む。(「追記」)

アメリカアサガオ *L. hederacea* (L.) Jacq. も栽培される熱帯アメリカ原産のアサガオで、果実は下向きにならず、がく裂片は細くて著しく反曲する点でアサガオやマルバアサガオから区別される。

という。本来は、これらの種子をあわせて牽牛子というようである。ただし、日本の古い書物では、その種子も花も牽牛子(ケニコシ)と言っている。

古今和歌集卷第十 物名 にも、

○ けにごし 矢田部(やたべの) 名実

打ちつけに濃し(ケニコシ)とや花の色を見むを  
へおく白露の染むる許(ばかり)を

〔新大系『古今和歌集』卷第十・444〕

◇牽牛子 「打ちつけに濃し」によみ込む。けんごし、

アサガオ。本草和名「牽牛子 阿佐加保」。

〔同右、注〕

があり（へ内は歴史的仮名づかいを表記したもの。括弧内のカタカナ筆者）、少なくとも平安時代初期には牽牛子は将来されていたことが推定でき、朝顔も栽培されていたであろう、と考える。が、「牽牛子」の用例が平安時代のものからしかないため、確実に言えるのは「平安時代に唐から輸入された」ということになるのであろう。しかし、日本への将来の時期を奈良時代とする説もある。

### 七、萬葉集のアサガオ

萬葉集に、カホバナ、カホガハナがある。

#### 東歌

○うちひさつ宮の瀬川のかほ花の（可保婆奈能）恋ひ  
てか寝らむ昨夜も今夜も

〔十四・3505〕

大伴宿禰家持の坂上大娘に贈る歌一首 并せて

#### 短歌

○高円の野辺のかほ花（容花）「面影に見えつつ妹は忘れかねつも

〔八・1630〕

秋の相聞 花に寄する

○石橋の間々に生ひたるかほ花の（貞花乃）花にしありけりありつつ見れば

〔十・2288〕

#### 東歌 譬喩歌

○美夜自呂のすかへに立てるかほが花（可保我波奈）

な咲き出でそねこめてしのはむ〔十四・3575〕

新大系『萬葉集』・全集『萬葉集』の注は、いずれも未詳としているが、それぞれの歌によって異なった説を掲げている。まとめれば日本国語大辞典第一版「かおばな」の項の①、

◇萬葉集に見える植物。ヒルガオのことか。アサガオ、カキツバタ、ムクゲ、オモダカ、または、美しい花の意とするなど諸説ある。かおよばな。かおがはな。

#### 《季・夏》

ということになる。アサガオやのちのユフガオ、ヒルガオ、ヨルガオなどと考え合わせると、カホバナは昼顔の花としてよい、と考える。朝に咲くアサガオが入ってきたため、昼に咲くカホバナということ、ヒルガオと呼ばれるようになったものであろう。

すなわち、カホバナのうち、朝に咲くものをアサガオと言った。萬葉集では次の五例。

山上憶良の、秋の野の花を詠む歌二首

○萩の花尾花葛花なでしこが花をみなへしまた藤袴朝顔が花（朝貞之花）その二

〔八・1538〕

秋の雑歌 花を詠む

○朝顔（朝朶）は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ  
咲きまさりけれ  
[十・2104]

秋の相聞 花に寄する

○臥いまろび恋ひは死ぬともいちしろく色には出でし  
朝顔が花（朝容貞之花）  
[十・2274]

○言に出でて言はばゆゆしみ朝顔の（朝貞乃）ほには  
咲き出ぬ恋もするかも  
[十・2275]

東歌 相聞

○わが目妻（めづま）人は放（さ）くれど朝顔の（安  
佐我保能）としさへこと我（わ）は離（さか）る  
がへ  
[十四・3502]

次に、新大系『萬葉集』（一九九九年～二〇〇三年）と  
全集『萬葉集』（一九九四年～一九九六年）のアサガホの  
注を掲げる。

新大系『萬葉集』では、

◇このうち、「朝顔」については、今の何にあたるか  
未詳。今日いう所の朝顔、または木槿、または桔梗  
かともいう。  
[八・1538 注]

◇「朝顔」は、牽牛子（いわゆる朝顔）、ノアサガオ、  
キキョウ、ムクゲなどの諸説がある。未詳。

[十・2104 注]

◇「朝顔のとしさへこと」の意味不明。「朝顔の」  
は枕詞かと思われるが、肝心の「としさへこと」  
が分からない。「としさへ」は、諸注「年さへ」と  
解している。  
[十四・3502 注]

全集『萬葉集』では、

◇朝顔が花——未詳。①牽牛子けにごし（今日の朝  
顔）、②木槿むくげ（あおい科の落葉低木）、③桔梗  
さきょうなどに擬する説がある。①は『本草和名』  
『和名抄』、②は『和漢朗詠集』、③は『新撰字鏡』  
にそれぞれ文証がある。①は平安時代に渡来した輸  
入植物で上代にはなかったとする説があり、②は七  
種のうちこれだけが木本である点に疑いがあり、③  
が比較的妥当かといわれる。しかし、在来種で昼  
間も咲き続ける牽牛子の存在が報告されており（二  
一〇四）、①説も捨て難い。ほかに旋花（ひるがお）  
説もある。なお、『歌経標式』に「風吹けば雲のき  
ぬがさ竜田山いとにほはせる阿佐我保我婆那」とあ  
るによつて、アサガホガハナと読む。

[八・1538 注]

◇朝顔——ここは牽牛子けにごしをいうか。↓②一五  
三八（朝顔が花）。ただしここは昼間も咲き続けて  
いる趣なので、ひるがお科ののあさがおをさしたも

のかとも思われる。のあさがおは夜明け前に咲き、夕方までしほまない性質を有する。咲き始めは透明な青紫色、日中はすみれ色、その後、赤紫色と微妙に変化する。ただ自生地が地域的に沖縄地方・伊豆七島・紀伊半島や四国・九州の南部と片寄っている点に疑問がなくもない。〔十・2104 注〕

◇朝顔が花↓二一〇四（朝顔）。ここも牽牛子けにこそをさしたのであろう。その花の大きく色鮮やかなさまをもって色ニ出ツの比喩とした。朝顔は一般に格助詞ガをとる。〔十・2274 注〕

◇朝顔の——朝顔↓②一五三八（朝顔が花）。この句、第四句の枕詞であろうが、かかり方未詳。

〔十四・3502 注〕

いずれも、アサガオ、ムクゲ、キキョウ説をあげ、昼間も咲いている2104の朝顔についてはノアサガオも考えている。

全集の注では、1538の歌の注には、「在来種で昼間も咲き続ける牽牛子の存在が報告されており」と、2104の歌を挙げています。その一方2104の歌の注では「ただしここは昼間も咲き続けている趣なので、ひるがお科ののあさがおをさしたのかとも思われる。」と書いていて、視点が揺れている。ここで重要なのは、「アサガホ」とい

う花の名前である。多くの花は朝に花を開き、その中には夕刻に花を閉じるものもある。が、「アサガホ」は、一般に、夕刻にまで咲くのではなく、午前中に花を閉じるから、「朝ガホ」と命名されたものである。そのアサガオが、夕影に咲いているのを見て詠んだのがこの歌なのである。この時代に朝咲く「アサガホ」の花が存在していたことは明らかである。したがって、キキョウ説、ムクゲ説、ヒルガオ説、ノアサガオ説は否定される（なお、巻第八・1538の注の中で、ムクゲについて、「②は七種のうちこれだけが木本である点に疑いがあり」とあるが、ハギを木本とも草本とも考えることがあり、これが否定の理由にはならない）。

《一、源氏物語のアサガホ》にも述べたように、アサガオが夕刻にまで咲きつづけることもあり、筆者は、巻第十・2104の歌は、夕刻まで咲き続ける牽牛（花を牽牛、種子を牽牛子という）を詠んだものと考ええる。

ここで問題は、2104の歌の「アサガホ」が在来種であったのか、牽牛子が奈良時代に将来されたものであったのか、ということにしばらく。もし、在来種の牽牛があったのであるならば、牽牛子を唐からの輸入に頼ることはなかったのではないか。牽牛子が薬に用いられることを知ったならば、在来種の牽牛子を活用することを考えてよか

ったであろう。よって、牽牛子が日本に将来されたのは奈良時代のことであり、朝に咲くその花をアサガホと名付けていたのである。

山上憶良の歌は「詠秋野花歌」であるから、この「アサガホ」も野に咲く花であったのであるが、この当時すでに野に咲くほどにアサガホがひろがっていた、ということである。梅のような木本は、庭園に植えて育てたであろうが、朝顔のような草は、一度植えれば種子が落ちて、ひとり生えて広がっていくことができる。大宰府大伴旅人宅に立派な梅苑があり、人々が集って梅花の歌を詠んだことがあった（萬葉集巻第五 815〜846 梅花歌三十二首）。梅がそのように成長するまでには、朝顔も野に咲く花にもなっていたであろう。

以上、牽牛子は奈良時代には将来されており、萬葉集の時代にも、すでに、アサガホは今日の朝顔と同じ花を指すものであった、と結論づける。やがて、花の形が似ていて夕に咲くウリ科の花をユフガホ（↓ユウガオ）、昼に咲くカホバナをヒルガオ、夜に咲くカホバナをヨルガオあるいはユウガオと名付けていった、と考える。

## 結び

アサガホはカホバナのうちの朝に咲く花で、萬葉集の時代にすでに、それが野に咲く姿を人々は賞でていた。

アサガホ⇨桔梗説は、新撰字鏡にその記述を見出すことができるが、同時に、新撰字鏡には、桔梗を「ヨカトトキ」「カラクハ（唐桑）」「サカキ（榊）」「アチマサ（檳榔）」「クスノキ（楠）」などとも言っている。この項目については信頼をおくことができない。いにしえの文物について、古辞書の記述が証明になることはあるが、このように雑多な和名をあてていることもあるので、古辞書の記述をそのままのみにすることはできない。

アサガホ⇨榊説は、和漢朗詠集に、命の短いものとして、榊の漢詩とアサガホの和歌とを並べてあるために、漢詩の榊をアサガホと誤解したことに始まるものである。和漢朗詠集は、同じ趣の詩と歌とを並べたのであって、榊⇨アサガホであるのではない。当時の人々が誤解して詠った例もある（定家『拾遺愚草員外』443など）。和漢朗詠集の扱いにも注意が必要である。



二〇一一年九月十七日、三重県にて。早朝に咲いた茶色の朝顔のうちの一輪が、夕刻まで咲き続け、しほみ始めたのは午後六時ごろ、しほみ了えたのは、午後十時を過ぎていた。

注

(1) 全集『源氏物語』凡例

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。：(中略)：

2 宛字は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。：(以下略)

4 漢語の韻尾の m・n 音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的には n 音(「ん」表記)に統一したが、例外もある。

三位さむみ(サンミ) 散位さんみ(サンニ)  
汗衫かざみ 竜胆りんどう(または「りうたむ」)  
(以下、略)

(2) 時代別国語大辞典上代編「あさがほ」「朝貞」「名」の項は、

秋の野花であるが、具体的に何をさしたものは未詳。「風吹けば雲のきぬがさたつた山いとほはせる阿佐我

保(あさがほ)が花(歌式)「萩の花尾花葛花瞿麦(ヘナデシコ)が花女郎花また藤袴朝貞(あさがほ)が花」(万一五三八)「朝貞(あさがほ)は朝露負ひて咲くといへど夕かげにこそ咲きまさりけれ」(万二一〇四)「こいまろび恋ひは死ぬともいちらく色にはいじ朝容貞(あさがほ)の花」(万二二七四)【考】①今日の牽牛子(あさがお)(一名けにこし)、②木樨(へむくげ)、③旋花(ひるがお)、④桔梗(へききよう)、⑤そのどれをも総称した名、とする説などがある。①は、和名抄や本草和名に「牽牛子阿佐加保(あさがほ)」とあり、今日の朝顔の名が相当古くからあったことが知られるが、第三例の内容と今日いう朝顔の習性とを比較するとき、これがただちに上代のアサガホであったとは断言できない。また、今日の朝顔は、葉草として輸入されたものといわれ、その点、万葉のころ、尾花や萩とともに野の草としてよまれているのも不審である。②は、新撰字鏡に「舜木樨」、和名抄に「舜岐波知須(ヘキチス)」とある「舜」が、名義抄には「樞アサガホ・舜キバチス、アサガホ」とあるのによるが、しかし、倭訓抄の「舜をあさがほとよむは中頃より見えたり」という疑問は残る。③は、本草和名に「旋花波也比止久佐(ヘヤヒトケサ)、一名加末(ヘカマ)、和名抄にも「旋花波夜比止久佐(ヘヤヒトケサ)、名義抄にも「旋花(ヘヤヒトケサ)」とあるものであるが、古文獻にこれをアサガホといったものを見ない点が不安である。ただこの草は、わが国固有のもので、田野に朝早くから夕方まで咲き、その花の色も紅色で、第三、四例などについては、この花が似つかわしいと思われる。④は新撰字鏡に「桔

梗阿佐加保（アサガホ）、又岡止々支（ヲカトキ）、本草和名に「桔梗阿利乃比布岐（アリノヒフキ）、一名 乎加止々岐（ヲカトキ）」とあり、名義抄にも「桔梗アリノヒフキ」とある。

新撰字鏡の和名を信ずれば、桔梗の和名は次第に変遷したもので、古くアサガホとよばれたものと考えられ、その点からはこの説がかなり有力と思われる。ただし、この草は第二、三例にはよくあてはまるが、第四例や枕詞アサガホノについては、その花の紫碧色である点、適当でない感がある。⑤は、第三例を木槿、第二例を桔梗としてゐるが、便宜的である。

とある。

(3) 注2に同じ。

(4) 全集『和漢朗詠集』の訓説の方針（菅野禮行）は、凡例

一、本文の掲出については、以下のとおりである。

：（中略）：

3 訓説にあたっては、古くから行われている『朗詠集』に特殊な訓み方を尊重するように努めた。：（以下略）

4 江戸時代前期における『朗詠集』の訓みの一形態

を示す意味で、御物粘葉本の複製本（便利堂 昭和五十四年版）の「解説并釈文」に掲載する「伝

後水尾院御訓点本」（寛文八年筆、享保十四年写）

の総付訓（上巻の釈文は三木幸信氏、下巻の釈文と凡例は谷山茂氏の担当。なお、原文を披見することができなかつたので、両氏のものに拠った）

を掲げた。

その示し方は、本文で採用した訓みと相違する箇所について、本文の左に片仮名で付載した。

：（以下略）：

などである。

(5) 萬葉集の「蘭」は、

○天皇太后共幸於大納言藤原家之日黄葉澤蘭一株抜取令持内侍佐々貴山君遣賜大納言藤原卿并陪従大夫等御歌一首この里はつぎて霜や置く夏の野に吾が見し草はもみちたりけり [十九・4268]

○梅花歌卅二首并序

：梅披鏡前之粉 蘭薰珮後之香： [五・815]

○：豈慮乎蘭蕙隔藥琴罇無用： [十七・3967]

の三例である。第一例はサワアラギ（サワヒヨドリ）。あとの二例は、新大系では「藤袴」（十七・3967）の注に、「梅花宴歌序にいう「蘭」で、藤袴のこと」とし、全集では五・815は「よい香りのする草を広くいう」、十七・3967は「共に芳香を発する草。具体的にいかなる植物をさすか、諸説があつて不明」とする。ほかに「蘭室」（五794）、「蘭契」（十七・3973）もある。

懐風藻には、

30 五言。春日侍宴。応詔。一首。

（贈正一位太政大臣藤原朝臣史）

：春日欲春鳥。蘭生折蘭人。：

52 五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。并序。

（大学頭從五位下山田史三方。）

：長坂紫蘭。散靄同心之翼。：

5 6 五言。七夕。一首。(從五位下出雲介吉智首)

…菊風披夕霧。桂月照蘭洲。…

6 7 五言。元日宴。応詔。一首。

(左大臣正二位長屋王)

…柳絲入歌曲。蘭香染舞巾。…

8 6 五言。侍宴。一首。

(贈正一位左大臣藤原朝臣總前)

…斜暉照蘭麗。和風扇物新。…

8 9 七言。在常陸贈倭判官留在京。一首。

(正三位式部卿藤原宇合)

…歲寒後驗松竹之貞。風生迺解芝蘭之馥。…

9 6

(從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣万里)

…放曠遊嵇竹。沈吟佩楚蘭。…

1 1 5 五言。飄寓南荒。贈在京故友。一首。

(從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂)

…風前蘭送馥。月後桂舒陰。…

1 1 7 五言。贈旧識。一首。

(從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂)

…万里風塵別。三冬蘭蕙衰。…

の九例。いづれも中国の詩文をもとにしたものであるから、

ラン。ほかに「君子の交わり」「同心の良友」の意味のこと

ばに用いるものもある。

(6) 源氏物語には、

○かゝるついでにとや思寄りけむ、蘭(らに)の花のい

とおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさ

し入て、「これも御覧すべきゆへ(ゑ)は有けり」と

て、とみにもゆるさで持給へれば、うつたへに思寄ら

で取り給御袖を引き動かしたり。

おなじ野の露にやつるゝ藤袴あはれはかけよかこ

とばかりも

道のはてなるとかや、いと心づきなくうたてなりぬれ

ど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やか

ことならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆへ(ゑ)はいかゞ」

との給へば、…

〔新大系三、藤袴93・13／94・2〕

※全集では

かかるついでにとや思ひよりけむ、蘭(らに)の花

のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつま

よりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはありけ

り」ととみにもゆるさで持たまへれば、うつたへ

に思ひもよらで取りたまふ御袖を引き動かしたり。

おなじ野の露にやつる藤袴あはれはかけよか

ごとばかりも

「道のはてなる」とかや、いと心づきなくうたてな

りぬれど、見知らぬさまに、やをらひき入りて、

「たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫や

かごとならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」との

たまへば、…〔全集三、藤袴332・2／7〕

のように、蘭の花と藤袴とが出てくる。新大系の「蘭」の注

には、

◇「らに」は「蘭」の字音。古今六帖の歌題、拾遺集・物

名にも見える。「らんなれども、必はぬる字をばにと書なり」(湖月抄)。「蘭 フヂバカマ」(名義抄)。

とあり、「蘭」は藤袴である、としているが、その次の注記の中で、

◇ 蘭の花の薄紫を「紫のゆかり」(血縁)に取りなしての言。

◇ (夕霧は) 蘭の花からずと手を離さずに。

◇ そんなこととはつゆしらず(蘭の花を) お取りになる(玉鬘の) 袖を(夕霧は) 引っぱった。

◇ 同じ大宮の縁で、藤袴ならぬ藤衣(喪服)を着ている二人のだから、一言だけでもあはれという言葉をかけていたきたい。

のように、ランは「蘭」、フジバカマは「藤袴」と言っている。全集では、「蘭」の注に、

◇ 藤袴の異名。原音「らん」のn音が開音節化して「らに」となった。秋の景物である。

と言っているが、現代語訳は、それぞれ「蘭」「藤袴」としている。

古今和歌六帖のラニは、

らに さがのみかどの坊にて

○ みな人のそのかにほふふぢばかまきみの御のたをわたるけふ(ママ)

ならのみかど

○ をり人の心のままにふぢばかまむべも色こく咲きてみえ

けり

としゆき

○ なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとののべを  
にははす

つらゆき

○ やどりせし人のかたみかふぢばかまわすれがたきかは  
にはひつつ

そせい

○ ぬししらぬかこそにはへれ秋ののにたがぬぎかけし藤ば  
かまぞも

そせい

○ をみなへしながふぢばかまおりつれば秋のみぢをかめ  
つけにして

○ あきかぜにほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふき  
りぎりすなく

いづれもフジバカマ。

拾遺和歌集第七 物名 には、

らに

○ 秋の野に花てふ花を折つればわびしらに(ラニ)こそ虫  
も鳴きけれ

〔拾遺和歌集卷第七 物名 366〕

本草和名に

「蘭草 一名水香 一名煎澤草 一名蘭香 一名都梁香草

已上三名出陶景注 一名蘭澤香草 出蘇敬注 一

名蕙薰 和名布知波加末」

和名抄に

「蘭 兼名苑云蘭一名蕙 蘭蕙二音 和名本草云布知波賀

萬 新撰萬葉集別用藤袴二字」

類聚名義抄に

「蕙 音恵 フヂハカマ」

がある。

(7) 懐風藻に、

36

五言。従駕。応詔。一首。

(皇太子学士従五位下伊與部馬養)

…舞庭落夏櫺。歌林驚秋蟬。…

がある。

(8) 朝日新聞二〇一一年五月二日土曜日

高橋睦郎「花をひ

ろう 薔薇(一)」に、源氏物語乙女巻の「…昔思ゆる花た

ちばな・撫子・薔薇・くたになどやうの花、くさぐさを植ゑ

て、春秋の木草、その中にうちまぜたり。」を挙げ、

ただしそのよみは大和言葉のウバラではなく漢語のソ

ウビ。その実体はわが国原生のハマナシ、ノイバラ、

テリハノイバラのどれでもなく、中国から舶来したコ

ウシンバラ(漢名を月季花。長春花ともいう)。作者

紫式部の同時代の大教養人、藤原公任の編んだ『和漢

朗詠集』首夏の項に白居易の詩から

麴頭の竹葉は春を経て熟し

階底の薔薇は夏に入りて開く

の二句が引用されているのを見ると、あるいは『白氏

文集』を写しただけかもしれない。

という記述がある。筆者は、『源氏物語』の植物を『白氏文

集』から写したものは考えないが、当時の和漢朗詠集の影

響も、高橋氏のここの推測に近いものであった。

(9) 新大系『萬葉集』注

◇「かほ花」は二二八八・三五〇五にも見えるが、何の花

にあたるか、未詳。

〔八・1630の注〕

◇「かほ花」は、未詳。既出(一六三〇)。

〔十・2288の注〕

◇「かほ花」は未詳。既出(一六三〇・二二八八)。

〔十四・3505の注〕

◇「かほ花」は既出(一六三〇・二二八八・三五〇五)。

沢瀉『注釈』は、オモダカであるとする。

〔十四・3575の注〕

全集『萬葉集』注

◇「かほ花」未詳。二二八八・三五〇五にも見え、川辺に咲

く花かと思われ、『物類呼称』に「かきつばた、常陸に

てかほばなと云」とあるのと符合するが、ここは山地に

ある草花の一種かと思われる。〔八・1630の注〕

◇「かほ花」未詳。この歌や三五〇五の趣からは水中に咲く

かきつばたかとも思われるが、一六三〇からみて山地に

ある草花のようで、特定の花の名でないとも考えられる。

あるいは、『新撰字鏡』に「砌」「磴」をイシバシと読ん

でおり、この歌のそれも石畳や石段の周りに植えてある

草花である可能性もある。↓②一六三〇。

〔十・2288の注〕

◇「かほ花」カホバナ↓二二八八。以上三句、恋ヒ寝を起

す序。そのことから考えて、この歌のそれは夜間花びら

を閉じる習性の植物か。〔十四・3505の注〕

◇「かほ花」ひるがお、または、はまひるがおをいうか。

二二八八などのカホ花とは別物であろう。『歌経標式』

に「阿佐我保我婆那」とあって、…ガ花という点で共通

する。愛する女のたとえ。